



ワンドルフホよりヴェイルゼンデまでこの幌馬車に乗る。

われわれは自然を、精神の焦慮不安をもたらす冷たく堅い現代の諸機械の輝きや、原爆の威嚇的な暗影の対極として、求めなければならぬ。世界は物騒なものになってきたが、良識がわれわれに示した「自然にかえれ」の道は、われわれをこの地獄界から脱出させ、よりよき未来へと導き得るのである。

前大統領 テオドール・ホイス

## リユネブルグ

# 自然保護地区見学記

西 村 宗 信

私は昨年、農林水産業生産性向上会議による欧州における木材流通視察団に加わる光栄に浴し、ソ連をはじめ欧州九カ国を約一カ月にわたり視察することができたが、一日、難かしい木材流通問題からはなれて、西ドイツにおけるリユネブルグ自然保護地区を訪れる機会に恵まれたことを大変、仕合わせに思う。

私はまず、リユネブルグ自然保護地区の位置をみなさまに申しあげねばならぬ。西ドイツの北部に属するこの自然保護地区は、北海に望むドイツ第二の大都市ハンブルグと、その西方百kmのプレーメンとの南方、ハノバアにいたる一帯のリユネブルグ・ハイデ地帯の中に存在する。ハイデとは荒地の意で、ドイツ全体

からみると、北西部の、いわゆる湿泥地帯の中である。

それは観光季節はずれた、晩秋の十月二十五日のことであった。

ハンブルグ郊外で、国立林産試験場のあるラインベッグの町に宿泊していた私達は、通訳以下六名、それに当日、特別参加のユーゴスラビヤの林学者・ブラニイラベジョスキイさんと、ドイツ滞在中の林野庁・農林技官の古宮英明さんを加えた一行八名は朝八時、小型バスで霧雨の中をリユネブルグへむけて出発。

E3の標識のあるヨーロッパ三号道路に出る。このアウトバンはハノバアに通じ、リユネブルグはハノバアの少し手前である。美事な四車線のアウトバンは、往復路線の境界に巾三m程度の緑地帯があり、小

さな樹木が植えられてある。このアウトバンの延長はドイツで四千km、イタリーでは五千kmであるが、とくにローマ・ナポリ間のアウトバンは有名である。しかしイタリーが有料であるに対し、ドイツでは無料である。

間もなくエルペ川を渡り、南下する。このエルペ川は、チエコスロバキヤにその源を発し、颯々と流れて北海にそそぐ川である。青空が雲のきれ目に見えて、車窓の右側からは太陽が雲を破って姿を表わそうとするが、時折り、しゅう雨が車の前をサツと通り抜けて、エルペ川の上に美事な虹がかかっている。

通訳さんのお話では、ハンブルグ・ハノバア間一帯はこのように灌木が若干ある程度の荒地で、ヒース地帯とのことである。

なるほど、あたりの風景は灌木と雑草で、いかにも土質がわるいらしい。アウトパンを走ること十分ほどで、やがて道巾のせまい右の道路にはいる。しかし、この沿線にはいると一部アカマツの造林木も見え、天然の雑木もかなりの成長ぶりで、北海道という不毛の地とは違い小さな牧場もあり、紅く黄色く色づいた樹々が美しい。七、八戸の集落があったが、わずかに残った庭の林檎の実がいやに小さい。ヨーロッパでは品種改良をするわけがなく、ジャムとかワインをつくるという。

やがて目的地についたらしいが、深い色の建物が二つ三つ見えるだけで、雲低く冷たい霧雨が顔を濡らす晩秋の広野の風景である。こんなところに何かあるというのだろうか。いささかウンザリする。

いやいや、これがリネブルグ自然保護地区のウンデルポであった。そして野原の駐車場の広場に車が一台置いてあり、ここで出迎えてくれた自然保護協会事務局長のドクター・ユートナさんと職員のみス・プロニャーンベア嬢、職員を主人にもつミセス・フロアシシュータズラ夫人の三名にご挨拶をする。事務局長さんはガッチリした身体でたくましく、二人の女性はまた素晴らしい美人であった。

事務局長さんから、概略の説明をうけ

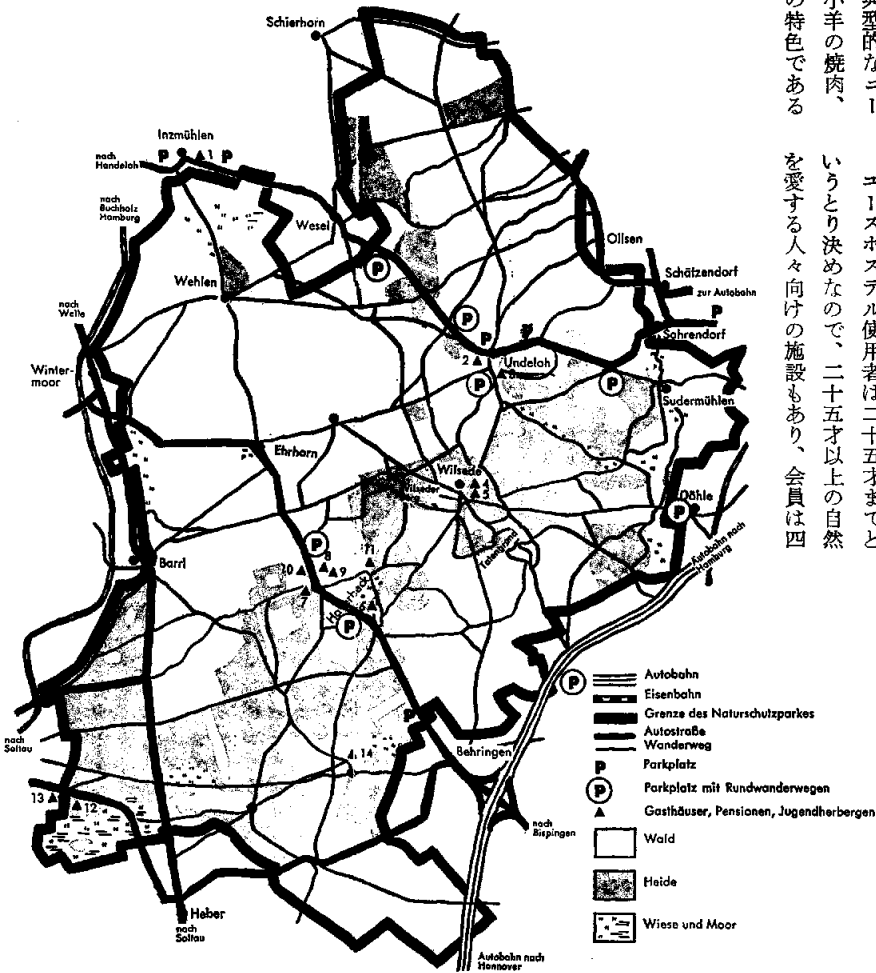
る。自然保護地区の面積は約二万ha、ドイツ最古の自然公園の一つで、森林一万二千ha、荒野四千ha、草地と耕地四千haからなり、ハイネズの叢林、広葉樹と針葉樹の対照、シラカバ並木、小羊の群れ、蜂箱、穴に住む動物、美しいエリカと典型的なニードーザクセン風の家屋。また小羊の焼肉、蜂蜜などが、このハイデ公園の特色であるという。

なお二万haのうち、五千haは自然保護協会の所有で、その他は州有林、および私有林である。年間予算は約三百万マルク（一マルク九〇円）であるが、会員制による会費と寄附、ならびに国費若干—十五万マルク—である。協会は、協会所有林以外の土地に対しては借地料を支払っているが予算不足の際は、富豪から寄附を仰げばたちどころに集まるので、その点、苦勞は要らないという。

環状路なので、必ず元の場所にもどり迷うことはない。自動車道路としては二本だけ開放、そのほかの道

路には希望者のため、馬車が用意されている。駐車場は無料、ゴミをとり除く費用は年間四万マルク、低廉な食時代のレストラフがあり、また売店に対して、トイレの管理を義務づけているのが面白い。ユースホステル使用者は二十五才までというとり決めなので、二十五才以上の自然を愛する人々向けの施設もあり、会員は四

マルク、員外者は六マルクとのことであるが、この種の会員制は、日本の現状レベルでは果たしてどのようなものであろうかと考えさせられる。肌寒い霧雨の中で一応の説明をうけたあ



と、先ほどの建物にはいり、まさに簡素で清潔な宿泊設備を見せてもらい、いよいよ自然保護地区内を見学する。ここは自動車乗入れ禁止の道路らしく、私達のために小さな馬の二頭立ての馬車が、いつの間にか三台用意されている。

なるほど、パンフレットの一部には『自動車用としては——通りだけが開放されており、もし貴方が、それ以上乗物に乗っていきたい（あるいは乗らなければならぬ）ときには、なにとぞ馬車をご利用ください』と書いてある。私は浦幌町の木下徳松さんと、犬をつれたミセスと三百目の馬車に乗る。毛布をひぎにかけてもなお寒い、犬は脚の短かい胴長の小犬で、名をバーツイというがなかなか落ちつきがない。

駅車台では、保護協会のおばあさんが手綱をとる。矮生のシラカバやネズミサンが目につく程度で、まさに荒野そのものである。時折り冷たいしゅう雨がくる。いかにハンブルグに近いとはいえ、こんな場所になぜ観光客が多いのかと、季節はずれのせいもあり、不思議に感じられる。途中、望楼があるので聞くと、州と協会、民間とが協力して四月から十月まで山火事予防のため、監視人を出すそうである。

また、この州では四月から九月まで、農家は畑の火入れ禁止の法律があるとのこ

と。しばらく馬車に揺られ、小高い山の下で降りる。バックキーが、よろこんで駆け出す。これは北海、バルチック海にもっとも近い山で、海拔一六九mのヴィルゼンデで天才数学者、ガウスがナポレオン一世に依頼され測量したといわれる起点のそばに、その記念石がある。晴天の日は、ここからハンブルグ市街がよく見えるという。

ふたたび馬車に乗り、揺られながら小さな鳥の群れをみたが、これはシラカバの林を好むビルタリンという名の鳥であった。蜂蜜の小屋もあった。ここでは蜂蜜は五百〇五マルク、蜂の巣は一〇マルクが相場で、養蜂家は、春はまずデンマーク国境に近いホルスタイン州のトウヒ林の中をまわり、そのあとこの地帯に移動してやってくるのだ。

石楠科に属するエリカは、ここだけの特産で有名である。エリカに似たカルーナブルガリスもある。日本の高山に生ずる矮小灌木のガンコウランのごとく、根が土壌をよく緊結し、赤紫の美しい小花が咲く。七月から九月にかけて、なだらかな起伏のなかに地平線まで群生するエリカは、ここリユネブルグ自然保護地区の主役なのである。そして美しいエリカが、たくさんの人々をここに招くのであらうと思われる。ここでは樹木を植えないようにしているが、

これはエリカは、日陰を好まないからである。

途中、羊小屋も見学。降りたり乗ったり幾度もくり返しながら馬車は進む。美人のミセスも寒そうだが、バックキー対手に愛嬌がよい。子供がいないので、バックキーが一番可愛いとのことである。タイムーラという姓の馭者のおばあさんは六十代であるが元氣者で、私の姓が彼女と似た発音だったので、これまた大変愛想がよい。

八kmほどの道をやるとヴィルセーデに着く。建物はレストラン一軒だけである。ここで昼食をご馳走になる。ご馳走の前に日本から持参したお土産を、事務局長さんには版画、両女性には美しい扇子をあげる

と、三人は大よろこびである。

皿の代わりに、樹皮のついたままのブナの素朴で偏平な台の上に、大きな豚肉の燻製が出る。じつにうまい。コッタが大皿を運んできてさかんにすすめるが、誰も遠慮してはいるようで、私はお代わりを頼むと、大変喜んでくれる。飲物はいすれもここでつくられたもので、最初はワイン、つぎの盃はハイドメーカーという酒、度数三八の強いもので、ジンのような樹脂の香りがする。ネズミサンがはいっているとのこと。

つぎの酒は、ハッカのはいつた六八度の地酒、少しなめてみたが、その強烈なものには

すっかり降参——。

このレストランでは、最盛期には一日五kgのコーヒーが飲まれるという。一人当り一〇〇なので、毎日五千名以上の観光客がこのレストランを訪ねる計算となる。もっとも、年間この自然保護地区を訪れる人は三百万にも達するというから無理もないと思う。

ヨーロッパのレストランでは五十年、百年の歴史をもっているのが多い。ご馳走になつたあと、五十年動続で先月表彰をうけたという七十八才のおばあさんと、一行は記念撮影をし、ヴィルセーデを出発する。

私達のバスはべつな個所に回されてあつたので、そこまで四kmほど歩くこととなり途中、事務局長さんから歩きながら説明をうける。

ウンデロの礼拝堂が紀元八百年の建設のことや、博物館の話、さらにまた年配向けの旅荘やら、森林探勝路とか森林教育路のこと等々。

すでに観光シーズンを過ぎた晩秋の、しかも小雨の降る寒い日であったが、ドイツ人の自然公園に対する考え方や、その利用度などを知ることができ、私達一行は名残りを惜みつつ、やがて彼らとお別れしたのである。

(副路支庁長)